

萬葉情意語の生成

—「忘れ貝」・「恋忘れ貝」—

賀 古 明

萬葉情意語は、萬葉歌人たちが、萬葉集歌において主体的に多用している情意表現語を表わす名称として用いる。

情意語は、一般的な親情の意を表わす語と、特に恋情の意を表わす語との二種に分け得る。これらは、当然、前者を、親情意表現語——親情意語、後者を、恋情意表現語——恋情意語と稱し得るものである。これらの語の中には、それらの語の表面意——一般意が、そのまま直接に親情意なり、恋情意なりを表わす語であることが明瞭に認め得るものがあることは勿論であるが、一方、その語の一般的表面意には、全く親情意も、または、恋情意をも表わす語義を有しない一般的景物描写語であるとみられる語であつても、ある時代圏の、更に、ある歌人圏内において、その時代の人々の間、その歌人圏内の歌人たちの間で、それらの人々の相互的理解の上に、一般的景物描写語に特定の意義を添加して用いることによつて、短詩形内により豊かな内容を盛り込もうとする、所謂作者的意欲に添つて使用され、更に、そのような語類が、その時代圏内、また、その歌人圏内での慣用を通して、その時代の人々、また、その圏内の歌人たちの間に主体的に多用されるに至つている語類があるはずであり、事実、そのような語類の存在を確認し得るものがある。

先に、筆者は、特に、萬葉歌人たちの間において、その萬葉歌人たちの相互理解の上に、一般的景物描写語に、特定の意義を添加し更に、そのための特定の用法語として用いることが、その慣用を通して主体的に多用されている情意語——それらは主として名詞類中に見出される——の特定の性格について、その用例語を指摘し、その立証論述を進め、発表もして来た。これらは、当然、「萬葉情意語」と稱し得る語類である。

それらの萬葉情意語類の生成は、必ずしも一律の時期、また圏内での使用状態において見出されるとは限らない。これは、勿論、言語としての生成・推移の実相態として、また、やむを得ないことである。故に、既見の萬葉情意語にあつても、必ずしも適格に、しかも十分に、その語を萬葉情意語と稱し得べき立証を得かねているものもあつた。特に、萬葉情意語としての特定性格において用いられるに至る以前の、その語の、一般的景物描写語としての使用態が、萬葉集中に全く見出されないものにおいては、この正確な判別は、きわめて困難な問題に当面し、立証を完了し得ないものもあつた。その中には、萬葉時代以前に——それは、資料的には、当然、記紀歌謡類を主として、その中に——既に、歌の表現充実のための、作者圏内での特定用語としての性格を持ち得ていたものであつて、た

だ、その使用例が、比率的に、きわめてわずかか見出され得ないものにおいて、その用語が、万葉集歌中においては、より多く、万葉歌人たちによつて用いられていると認め得ることにより、それが、万葉歌人圏内の主体的多用態のものとして、その用語を万葉情意語と認定したのもある。

このような、資料の稀少の故に、実は、万葉歌人たちが、かれらの万葉情意語として用い、その歌意の拡充に使用するに至つていた用語の発見に困難が介在するが、しかしなお存在の可能性が推考し得ることである。それらの語は、現在、なお、その発見、更に、その立証を未だ十分に果し得ぬままに、単に、一般的景物描写語と解されるにとどまつているものがあると思考し得る余地は十分に存在する。

しかし、また、たまたま、万葉集中に、万葉情意語と認め得る語に關連して、それが万葉情意語として使用される以前の使用態において用いられていると認め得る用語（これを、この場合、「非情意語」と称することとする。）を見出し得るものもある。なお、この場合のように、万葉情意語と、その非情意語とが共存する場合においても、なお、大略、三様の存在態が見出される。その一つは、同時機・同歌人圏内においてのみ見出される場合であり、もう一つは異時機・異歌人圏に、万葉情意語と、その非情意語としての使用態が見出される場合である。更に、両存在態の使用が併有されている場合ともある。この中、第一の場合には、その用語が万葉情意語として用いられていると確認することには困難が伴う用例が多いことは、いうまでもなく当然のことであろう。わずかに、その使用量の多寡を一つの基準として、推測するのほかに、その結論はきわめて危険性の多いものと見られるのほかにないものである。これに比して、第二・第三の場合には、言語の史的生育性によつて、より確証が容易である。しかるに、万葉集中において、後者のような用例語は、まだあまり多く

見出し得られていない。ただ、しかし、わずかな用例にしても、それが存在することは、万葉情意語が、それ以前の非情意語としての一般的景物描写語から生育して、万葉情意語として、ある時機・ある歌人圏内において主体的に多用されるに至つていて、その発想契機をうかがい得ることが可能となる。なお、万葉集歌類の末期圏（家持圏）、更に、平安時代歌人圏にまでにおいて、その用語の万葉情意語としての特定性格が、次第に稀薄化し、類型化し、更に、その外型繼承的のみの使用態となるに至つていて性格を認め得る場合に、全く完璧に、その用語が、万葉情意語であることを確認し得ることとなる。筆者は、この代表的用例語として、「垣」類語を採りあげ、その立証を経て、万葉情意語の存在確認をなして来た。注⑨なお、その他の十数語に關する研究も發表した。

この同範疇内の研究の一つとして、本論においては、「忘れ貝」類の語を対象として、一般的景物描写語——非情意語が、万葉情意語として、生成・生育する姿態と、その契機とを見つめ、確認することを主眼とする。

万葉集中、「忘れ貝」の語は、単に、「忘れ貝」として用いているものと、「恋忘れ貝」とするものがあり、しかも、前者の「忘れ貝」の使用態の意義は必ずしも一樣のものとは見られない点がある。本論は、この「忘れ貝」の用法意義と「恋忘れ貝」の語の性格を検討し、この二種の同類語の使用例における意義・用法を見きわめ、前記の、本論の主眼の立証を確かにしようとするものである。

しかし、なお、この本論に入る前に、その考究の前提として、同類語と認められて来ている「忘れ草」及び「恋忘れ草」の二種の同類語の使用の意義・用法を再検討し、その結果を一つの足場として、論証を進めることとした。

「忘れ草」また「恋忘れ草」の語に關しては、今日まで説かれて來ている説が殆ど定説として取扱われており、全く論議の余地がないものとされている。しかし、歌中用語として、この語類の発想基底と、特に、その表現時における使用態の性格の把握は、必ずしも見きわめつくされているとはなし得ないものが残されている。しかしこれに關しては、筆者が、先に發表した「旅人の望郷歌」^注と題する小論中において、その点の解明をなし、その立証をなしている。故に、今は、本論の主眼の理解を補うための前提論として、その要点を略記するにとどめることとした。

「忘れ草」の語を用いている用例歌は、既知のとおり、次の四首、

忘れ草(萱草) わが紐に著く 時となく念ひわたれば生けりと
もなし

忘れ草(萱草) 垣もしみみに植ゑたれど 醜の醜草なほ恋ひに
けり

12・三〇六〇、寄物陳思

帥大伴卿の歌五首(五首中の第三首)

忘れ草(萱草) わが紐に著く 香具山の古りにし里を忘れぬが
ため

3・三三四、雑歌、旅人

大伴宿禰家持の、坂上家の大嬢に贈れる歌二首離り絶ゆること数年
せり來

忘れ草(萱草) わが下紐に著けたれど 醜の醜草 言にしありけり

り 4・七二七、相聞、家持

である。この四例歌において、原文にはすべて「萱草」の字を以て表記している。この「萱草」については、既に諸注訳書にも引用されていることではあるが、倭名類聚抄の巻十、草木部、草類の項中に、

「萱草兼名苑云、萱草、一名忘憂 萱音盾、漢語抄云、和須體
久佐、俗云如二環藻二音一

とあり、更に、その箋注の中に、

「嵇康養生論、合歡獨と怒、萱草忘憂」

とあつて、ここには「萱草」を、唯々単なる一般的な「憂」を「忘れるもの」としているのみである。

しかるに、万葉集中の用例においては、巻十二所収の二首は、「寄物陳思」に収められており、この二首を含んで、その前後の二十五首は、すべて、広義の草類に「寄」せて、「恋」の「思」いを「陳」べているのである。故に、この二首の場合の「寄物」は明らかに「忘れ草」であり、その「忘れ草」に「寄」せて、「恋」の「思」いを「陳」べている歌であると認め得ることであり、この二首が恋情意表現歌であることは明らかである。

次に、家持の「忘れ草」の歌は、その題詞によつて、これも、恋情意表現歌であることはいうまでもなく、「相聞」の部に入つてゐる。

ただ、この四例歌の中、残る一首の、旅人の歌は、部類としては「雑歌」に収められており、万葉集の編者は、この歌を恋情意表現歌とはみなかつたことは明らかであり、後代の研究者においても、そのほとんどすべてが、この一首を含む「帥大伴卿の歌五首」の歌は、老年にして、大宰の帥として九州の地に赴任した旅人が、その寂寥感——「憂」を基底とする「望郷」の心情を歌つたものとみて來ている。すなわち、すべて、それらを恋情意表現歌とは認めていない。しかし、実は、この五首一連以後の旅人の作品には、その発想基底に、亡妻大伴郎女に対する追慕の心情としての恋情意がすべてに豊かに含まれており、むしろ、その感情が発想の中心基底となつてみるとみるべきものである。このことは、また、旅人の作風の特徴を見つめること、特に、その用語の用法からも十分に認め得ることである。故に、これらは、単なる「望郷歌」ではなく、む

しる恋情意表現歌とみるべきものである。特に、この五首一連の中、先に用例歌として採りあげた「忘れ草……」の歌は、この五首中でも、もつとも、恋情意表現歌としての用語（「忘れ草」・「古りにし里」）を用いており、明らかに恋情意表現歌と認め得る歌となし得るものである。注²

以上の考察によつて、万葉集中で、「忘れ草」の語を用いている四例歌は、すべて、恋情意表現歌である故に、「忘れ草」の語は、万葉集中においては、恋情意語として用いられていることを確認し得たことになる。

なお、このように、「恋」の「憂」を「忘れ」るために用いる「草」としての、同類語「恋忘れ草（恋忘草）」の語を用いた用例歌が一首見出される。すなわち、

わが屋戸の軒の子太草生ふれども 恋忘れ草 見れどいまだ生ひず

11・二四七五、寄物陳思

がある。この歌の主旨は、「恋」の「憂」を一時でも「忘れ」させてくれるという「恋忘れ草」を植えたけれど、余計な「子太草」ばかり生えて、「恋忘れ草」が生えないので、「恋」の「憂」を「忘れ」ることも出来ない詠嘆を詠んでいるものである。この歌は、卷十一中の「柿本朝臣人麻呂歌集出」の中にある歌であり、前記の四例歌より以前の作と認め得るものである。したがつて、この「恋忘れ草（恋忘草）」は、万葉集中の唯一の例語ではあるが、なお、「恋忘れ草」の意を表わす用語として用いられている「忘れ草」の語以前の用語である。故に、「忘れ草」の語は、「恋忘れ草」の意の表記文字として用いた漢熟語「萱草」の借用表記を通して、「恋忘れ草」の「恋」を省略して「忘れ草」の語によつて「恋忘れ草」の意を表わす用語として用いるに至つたものと見られる。

したがつて、「恋忘れ草」↓（萱草）↓「忘れ草」の系譜におい

て、「恋忘れ草」の語は勿論、「忘れ草」の語も、すべて、「恋」の「憂」を「忘」れるための「草」として恋情意語の本来意において、一貫して、継承使用されているのである。

本論の対象とする「恋忘れ貝（恋忘貝）」及び「忘れ貝（忘貝）」も、「恋忘れ草」「忘れ草」と類型語として、類情意語とみられて来ている。しかし、この二語においては、前記の「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系譜と同じ系譜型において、「恋忘れ貝」↓「忘れ貝」という系譜のみでは解明出来ない用法例がある。この問題点は主として「忘れ貝」の語の用法の意義の再検討と、そこに見出された結果として「恋忘れ貝」の語との系譜的関連とに解明を得ることができると考えられる。

「恋忘れ貝」の語を用いている用例歌は、次の五例、

(a) 暇あらば拾ひに行かむ 住吉の岸に寄るとふ恋忘れ貝（恋忘貝）

7・一一四七・撰津作

(b) 住吉に行くとふ道に昨日見し恋忘れ貝（恋忘貝） ことにしありけり

7・一一四九・撰津作

(c) 手に取るが故に忘ると 海人のいひし恋忘れ貝（恋忘貝） ことにしありけり

7・一一九七・羈旅作

同じ坂上郎女の、京に向かふ海路に浜の貝を見て作れる歌一首

(d) わが夫子に恋ふれば苦し 暇あらば拾ひて行かむ 恋忘れ貝（恋忘貝）

6・九六四・雑歌

(e) わが袖は手本とほりてぬれぬとも 恋忘れ貝（故悲和須礼我比）とらずは行かじ

15・三七一一・遺新羅使

がある。この中、卷七所収の三首は、卷六所収の坂上郎女の作より

一步以前のものとみられる。このことは、既に、武田祐吉博士が、「巻七」の解説に

「作品の時代は、巻三と部類法が同じなので、それと同時代の作者未詳の分を集めたと見てよいのだが、大伴の家持の集録の時代になると、作者の知らないことはすくなくないだろうから、大体、その以前までの作が大部分である。」注④
といわれている説に従い得ることである。

なお、坂上郎女の歌の、詞書の「同じ」は、直前の長歌(6・九六三)の詞書の、

「冬十一月、大伴坂上の郎女の、帥の家を発ち上道して、筑前の国宗形の那名児山を超えし時、作れる歌一首」

を受けているものであり、その作歌時は、天平二年である。故に、天平八年の「遣新羅使」の歌中の語である「恋忘れ貝」(e)よりも以前のものである。

故に、「恋忘れ貝」の歌の系譜は、巻七所収の三首〔(a)恋忘れ貝〕(a) (b) (c)を先行歌とし、その中の「恋忘れ貝」(a)を模本として、大伴坂上郎女が、「恋忘れ貝」(d)を作歌したと見てよいであろう。なお大伴坂上郎女の作品は、ほとんどこのような先行作品、特に古代民謡と見得るもの、又は、それに近接して、その発想態を継承している歌類を模本として作歌している歌風であることも、注⁴それを立証するものである。したがって、「恋忘れ貝」(e)は、以上のこれらの「恋忘れ貝」の四首の歌のいずれかを模本とし、継承して歌われているものであると見得る。

しかし、「恋忘れ貝」の中で、先行歌であるこの三首〔(a) (b) (c)も、巻七所収歌であることは、これらの三首を、直ちに古代民謡歌とすることはできないものではあるが、その発想は、古代民謡の中の発想の要素語から得ているものとみなし得る。しかし、「恋忘れ

貝」の語は、万葉集中の用例の所収巻のみによつて見る時は、歌語的造語とみるべきものである。その意義・用法をそのまま継承して大伴坂上郎女の「恋忘れ貝」(d)が生れ、「遣新羅使」歌中の「恋忘れ貝」(e)が歌い出されているのである。

この「恋忘れ貝」の情意語としての意義・用法をもつともわかりやすく表わしているのは、この五首の例歌の中では、大伴坂上郎女の歌であり、その「恋忘れ貝」の語は「恋」の「憂」を一時でも「忘れ」させてくれるもの(「貝」として用いられていることは明らかである。ただ、この大伴坂上郎女の歌は、大伴旅人の帰京の天平二年の折、それと略々同時頃に帰京の途についた折の作品であることは明らかであるけれども、その歌の上句「わが夫子に恋ふれば苦し」中の「夫子」が誰れであるか不詳であり、一方、「夫子」の語は、万葉集中では必ずしも「恋」の相手のみをさす語ではなく、一般的に女性が男性に対して用いる語として用いられている性格から、この歌を「恋」歌とみなし得ないという説も立ち得る。しかし大伴坂上郎女の歌の場合は、その作風の特色上から見れば、大伴坂上郎女は「恋」の相手ではない男性に対して与える歌においても、その歌の表現手法には、多くの古代民謡圏に発想の基底を持つとみられる語句を巧みに受け用いる手法を、単なる「挨拶」の歌としての「戯歌」や所謂「宴席歌」にも用いている。注⁴故に、その歌のその場での内実意は、前記のいづれであるとしても、その歌の表現手法上からは、明らかに、「恋情意(表現)歌」とみなし得る歌であるので、これを「恋情意歌」発想による手法歌の例歌となすことは何らさまたげられないことである。

この大伴坂上郎女の「恋忘れ貝」(d)の歌によつてわかりやすく理解される、この用語の意は、「恋忘れ貝」(a) (b) (c)の歌においても、そのままに通意するものである。すなわち、「恋忘れ貝」(a)の歌にお

いて、歌中の「恋忘れ貝」の用語意に対応して、第一句を「暇あらば」の順接の仮定条件法とし、これを、第二句の「拾ひに行かむ」の願望表現で受けられている。その内実は、「恋」の「憂」にたえず苦しみながらも、その「憂」を一時的にも「忘れ」させてくれるという「貝」を「拾ひに行く」「暇」さえもない苦しさを歌い表わしている歌である。

「恋忘れ貝」(b)の場合は、第五句「言にしありけり」で受けられている対応において、この歌中の「恋忘れ貝」に寄せられている意義が、前述の意義によつていることは明らかであり、その「恋忘れ貝」が現実は何ら「恋」の「憂」を「忘れ」るのに役立たなかつたことに對する嘆きを歌っているのである。

(なお「住吉に行く」とふ道に昨日見し)は、前歌の「住吉の岸に寄るとふ」とその発想の基底を同じくする「恋忘れ貝」の連体修飾句である。この修飾句の意義の主体は、勿論「住吉」である。

しかし、このことについては、本論で、今、直接に論ずる要もないので省略することとした。)。

「恋忘れ貝」(c)の歌は、歌中の「恋忘れ貝」の連体修飾句である上三句「手に取るが故に忘ると 海人のいひし」によつて、「恋忘れ貝」に寄せられている用語意が略々示されていて明らかであり、その発想の心情は、前歌(「恋忘れ貝」(b))の場合と同じである。

「恋忘れ貝」(e)の歌は、上記の四例を受けての発想の表現歌であり、天平八年の遣新羅使の往路の中「竹敷の浦に船泊てし時、各心緒を陳べて作れる歌十八首」の中の一詩であつて、その人の、郷里にのこして来た「妹」に對する「恋」情の「憂」を「忘れ」るために、「わが袖は手本とほりてぬれぬとも」「とらずは行かじ」に表わされた心情は、「恋忘れ貝」に寄せられて用いられている意義・用法をそのままに受けての用法であることは明らかである。

この「恋忘れ貝」に對して、その先行要素語としての性格を有すると認められる「忘れ貝」の語が、実は、見出されるのである。この点においては、この二語の系譜的関連は、前記の、「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系譜とは、全く逆態であることとなる。しかし、このことは、万葉集に見出される「忘れ貝」の語のすべてに關する問題ではなく、その中の、ある用例のみに見出されることであり、このように、「忘れ貝」の語の中に、系譜的に、二種の用法性格と意義の相違があると見得る点を解明することが、本論の目標であるのである。その結果として、「忘れ貝」類の語において、その系譜中に一般的景物描写語が、恋情表現のための万葉情意語としての性格を負うに至る契機的関連を認め得、「万葉情意語の生成」の姿体を見つめ得るものがあるのである。

「忘れ貝」の語を用いている用例歌は、次の五首、

(a) 大伴の美津の浜なる忘れ貝(忘貝) 家なる妹を忘れて思へや

右の一首は、身人部の王 1・六八、雑歌

(b) 紀の国の飽等の浜の忘れ貝(忘貝) われは忘れじ年は経ぬとも 11・二七九五、寄物陳思

(c) 海処女潜き取るとふ忘れ貝(忘貝) 世にも忘れじ 妹が光儀は 12・三〇八四、寄物陳思

(d) 若の浦に袖さへぬれて忘れ貝(忘貝) 拾へど 妹は忘らえなくに 12・三二七五、羈旅発思

或本に、忘れかねつも 12・三二七五、羈旅発思

(e) 秋さらば わが船泊てむ 忘れ貝(和須礼我比) 寄せ来て還れ 沖の白浪 15・三七二九、遣新羅使歌

この五首の中、前の三首(a)(b)(c)の「忘れ貝」の語は、ただ、物を「忘れ」る意を負う語として、比喩的に前提されているのみであり、その「忘れ貝」の「忘れ」は、その三首の下句中の「忘れて念へや」及び「忘れじ」の「忘れ」の語を引き出すためのみの用法のものとして用いられているにすぎないのであり、それは、「恋」の「憂」を一時でも「忘れ」たいと望むために「拾ひ」持つ「貝」の意を負う語としては用いられている「忘れ貝」＝「恋忘貝」としての用法のものではない。

しかるに、後の二首(d)(e)では、その「忘れ貝」の語が、明らかに「恋忘れ貝」の場合と同じ意義・用法において用いられている。「忘れ貝」(d)の歌の場合は、今は旅路にある身として、離れている「妹」を「恋」しく思う「憂」の心に耐えられなく、一時でも、その「憂」を「忘れ」ようと思つて、「袖までぬれて」との「恋」心の「憂」を「忘れ」という「(恋)忘れ貝」を「拾へど妹は忘らえなく」という詠嘆の感を歌つているのであり、この場合の「忘れ貝」の「忘れ」は、単に「忘らえなく」の「忘れ」を引出すためのみの用法でなく、対応意に用いられているものであつて、「恋忘れ貝」の意義・用法と全く同様に共通する発想基底の表現手法のものである。

更に、「忘れ貝」(e)の歌の場合は、天平八年の遣新羅使の一行中の作者の歌であり、その往路の途中、「多麻の浦」(岡山県玉島市の海上と推定される地)あたりでのものであつて、その長歌及び反歌二首一連中の第二の反歌中の用法のものである。その長歌、

物に属きて、思ひを発せる歌一首 短歌併せたり

朝されば、妹が手に纏く鏡なす 御津の浜びに 大船に真搦鬘貫
き から国に渡り行かむと 真向ふ敏馬をさして 潮待ちて 水
脈びき行けば 沖辺には白波高み 浦みより榜ぎて渡れば 吾妹

子に淡路の島は 夕されば 雲居がくりぬ さ夜ふけて 行く方
を知らに 吾が心明石の浦に船泊めて 浮寐をしつつ わたつみ
の沖辺を見れば 漁する海人の娘子は 小船乗り たららに浮け
り 暁の潮満ち来れば 草辺には鶴鳴き渡る 朝風に出出をせむと
船人も 水手も声よび 鳩鳥のなづさひ行けば 家島は雲居に見
えぬ 吾が思へる心和ぐやと 早く来て 見むと思ひて 大船を
榜ぎわが行けば 沖の浪 高く立ち来ぬ よそのみに見つつ過ぎ
ゆき 多麻の浦に船を停めて 浜びより浦磯を見つつ 哭く子な
す 哭のみし泣かゆ 海神の手纏の珠を 家裏に 妹に遣らむと拾
ひ取り 袖には入れて 返し遣る使無ければ 待てれども 験を
無みと また 置きつるかも

15・三六二七

に寄せられている主情は、別れて来た「妹」に対する恋々の情意の
表出であることは、その歌い出しの「朝されば妹が手に纏く鏡(な
す)」の序詞の発想からはじまつて、なお、それにつぐ部分の、そ
の船路の経路の敘述表現の中に見える「吾妹子に淡路の島は 夕さ
れ ば 雲 居 か くり ぬ」の掛詞の発想、更に続く、「さ夜ふけて 行方
を知らに 吾が心明石の浦に 船泊めて 浮宿をしつつ」の発想を
受け、更に、また、「吾が思へる心和ぐやと 早く来て 見むと思ひ
て 大船を榜ぎわが行けば 沖つ浪 高く立ち来ぬ…… 哭く兒な
す 哭のみし泣かゆ」の心情表現を受け、それに対応して「海神の手
纏の珠を家裏に 妹に遣らむと拾ひ取り 袖には入れて 返し遣る
使無ければ 持てれども 験を無みと また 置きつるかも」と表
現されている、この結びの部分は、明らかに、「恋」心の「憂」を
一時でも「忘れ」るようにと望む恋情意の表現である。なお、この
長歌に続く、第一の反歌、

多麻の浦の沖つ白玉拾へれど またぞ置きつる 見る人を無み

15・三六二八

は、反歌の原初形式の表現手法である、長歌末句の繰返しの手法であるが、しかも、なお、その第五句「見る人を無み」は、その情意を、更にはつきりと示し、強調の表現をしているものである。このような、長歌及び第一の反歌の主旨である恋情意を受けとる、第二の反歌中の「忘れ貝」の語は、もう、詳説の要なく、「恋忘れ貝」の意に用いていることは明らかである。

このように「忘れ貝」の用例には、その意義・用法において、二種の別がある。その用例歌の所収巻の性格から見ると、単なる「忘れ貝」の用例歌は、巻一(a)、巻十一(b)、巻十二(c)であり、「恋忘れ貝」の意に用いられている「忘れ貝」は、巻十二(d)巻十五(e)であつて、両者の共存の巻は、巻十二である。

なお、「恋忘れ貝」は、前記のとおり、巻七巻六巻十五である故に、単に「忘れ」の語を引き出すためのみに「忘れ貝」の語を用いている「忘れ貝」の用例の三例(a)・(b)・(c)、及び「恋忘れ貝」と同じ意義・用法に用いられている「忘れ貝」(d)との四例は、「恋忘れ貝」の用例の五例より以前のものであることは明らかである。なお巻十五所収の「忘れ貝」(e)と「恋忘れ貝」(e)とは、共に、前例歌の類型的継承用法のものであるにすぎない。

したがつて、「忘れ貝」・「恋忘れ貝」の系譜は、「忘れ貝」(a)(b)(c)↓「忘れ貝」(d)↓「恋忘れ貝」(a)(b)(c)↓「恋忘れ貝」(d)↓「恋忘れ貝」(e)・「忘れ貝」(e)と、その用法において推移していることがみられる。

このことは、「忘れ草」類の系譜が、前記のように、巻十一の「恋忘れ草」の用語がもつとも古く、「忘れ草」としての巻十二(二例)・巻三(一例)・巻四(一例)の、「萱草」の用字による用語に移つているが、しかし、その用語の意義・用法は、一貫して、恋情意語である性格を持つていることは、系譜的性格において、相

異性を持つていることが認められることである。

それは、単に、「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系譜型に対して、一方が、「忘れ貝」↓「恋忘れ貝」という逆の系譜型を持つていることに關してのみではなく、むしろ、注意すべき点は、「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系譜が、漢熟語「萱草」を仲介とする表現用語の外形的変移であるのみで、両用語とも、「恋」の「憂」を一時でも「忘れ」ようにするために用いる「草」という意義とその用法においては全く同等の恋情意語であるのに対して、「忘れ貝」↓「恋忘れ貝」(↓「恋忘れ貝」・「忘れ貝」)の系譜においては、特に、その初頭部の「忘れ貝」の用法が、前記のように、その下句半に用いられる「忘れ」の語を引き出すためのみの、単なる序詞的用語であり、それらには、何らの恋情意語性が意識されるまでに至つていない、単なる景物描写語として用いられているにすぎないものである。

ただ、なお、系譜上、その後の、「恋忘れ貝」↓「恋忘れ貝」・「忘れ貝」の部分の系譜型は、その意義・用法の特定性格においては、「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系譜のものと同類性の、恋情意語のものである。

ここに、単なる景物描写語としての「忘れ貝」が、まず、それに「恋」の語を添加することによつて恋情意語となり、その特定用法の性格を通して、また、更に、その影響のもとに、単に「忘れ貝」の語のみでも、それを「恋忘れ貝」と同意義・同用法の恋情意語として用いることにもなつていると解し得ることは、本論の主題目である「万葉情意語の生成」の一つとしての「恋情意語の生成」の姿態が、万葉集歌中の用例として認められる適例といひ得ることである。

ただ、この場合、なお、「忘れ貝」(d)が、既に、恋情意語として

の性格において用いられていることの解説が正当になし得ない点が残る。

この点の問題は、前記した類型語としての「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系列における、その表現の推移態と、それが現われている「時」と「場」との考察を重要な対比資料として、説明を進め、立証を確かに行うことによつて、妥当な「生成」経路を把握し得ると考えられることである。

それは、「恋忘れ草」・「忘れ草」類の歌の所収巻による、歌の詠出の「時」と「場」と、「忘れ貝」・「恋忘れ貝」類の歌の、それとを対照して、系譜論上から、この説明が求め得られる可能性が存在する。

その考究結果としては、すなわち、「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系列と、「忘れ貝」↓「恋忘れ貝」↓「恋忘れ貝」・「忘れ貝」の系列とを並列して、その「時」と「場」との探究結果を通して見れば、特に、「忘れ貝」(b)(c)及び「忘れ貝」(d)は、「恋忘れ草」及び「忘れ草」(a)(b)とは、共に巻十一・巻十二の所収の用例であり、この両系列の、上記の部分は、同時同場圏内の歌とみなし得る存在性格が認められ、その、いずれかの、いずれかの一方に對する、特定表現手法の意義・用法の性格の影響関係の存在が十分考え得ることである。この場合、「忘れ貝」(a)から「忘れ貝」(b)(c)は、前記のとおり景物描写語としての使用性格の語であるに對して、「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系列は、すべて既に、恋情意語としての性格において用いられている語である。ここに、言語意の推移現象として、当然、「恋忘れ草」・「忘れ草」の恋情意語としての特定性格による使用態は、同時圏内使用語である、景物描写語としての「忘れ貝」の語中の「忘れ」という共通要素語の存在と、「忘れ+形物名詞」という類型性とを、手掛りとして、それが

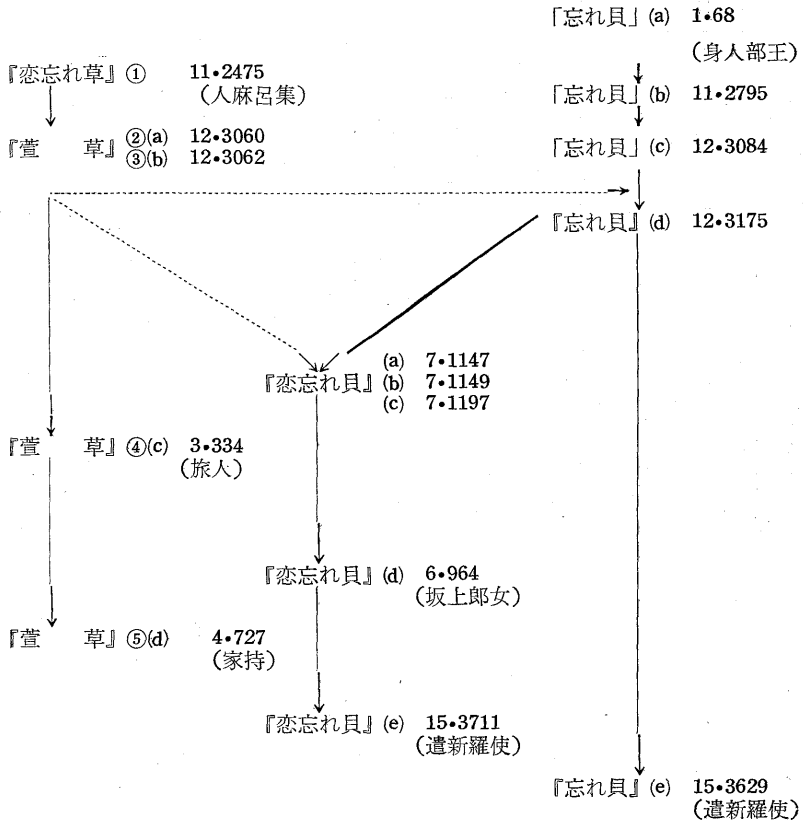
「忘れ貝」の語形のまままで、恋情意語として使用される意義・用法の特定性格の添加により、「恋忘れ貝」と同意義・同用法の恋情意語として、歌人間での慣用的使用態を生ぜしめていると見得ることは、むしろ、必然的な言語現象と認め得ることである。ここに、単に景物描写語であつた語が、歌人間の共通理解を通して、それに特定の意義・用法を添加し、慣用の上に特定の恋情意語が生成されるに至る経路を明らかに認め得ることである。

なお、系譜上、その後の使用態は、この恋情意語としての「忘れ貝」の特定の使用性格がそのままの形で継承されているものと、一方に、「恋忘れ草」の語表記の、恋情意性の、表出・享受の明瞭性・容易性が、それを模本として、当然「恋忘れ貝」の語形をも生成せしめるに至つており、その「恋忘れ貝」の語形もまた、そのままに後に継承使用されている。

この「恋忘れ草」「忘れ草」の系列と、「忘れ貝」「恋忘れ貝」の系列との相互間において、同時圏内所在の関連を通しての影響関係を「場」の姿態とし、景物描写語が特定の恋情意語として生成・使用されている「時」の系譜の様相を、わかりやすく表示すれば、次の表のようになる。(次頁の表を参照)

以上の論述によつて、「忘れ貝」↓「恋忘れ貝」↓「恋忘れ貝」・「忘れ貝」の系列に見た「恋情意語の生成」姿態に對して、「恋忘れ草」↓「忘れ草」の系列は、情意語としては、先行的に、恋情意語としての特定性格を持つているものとして用いられたものであり、「忘れ貝」類の系列に對しては、その語が、恋情意語として生成するための、同時圏内存在における基底的影響語であつたことを認め得るのである。

上記の論述は、「情意語」、特に、「恋情意語」の「生成」の経



路を、万葉集中に見出し得る好適の一例として、採りあげて立証したものである。

しかし、このように、「生成」以前と「生成」以後との、意義・用法を比較研究し得る用例資料が、万葉集中に共存する場合は、景物描写語が情意語として用いられるに至つては性格の発見は、比較的容易である。しかし、このような共存の場合の用例は、むしろ稀少であり、したがつて、情意語——恋情意語として用いられている景物描写語の検出はかなり困難な場合が多く、その立証はまたかなりの曲折した考察・検討を経なければならぬ。しかも、なお、これらのような特定の情意語の存在はなお十分に推考し得る余地が多く、その発見の可能性も十分にあると考えられることである。

しかも、その語が、特に「万葉情意語」であると確認するための立証は、更に、万葉集中よりも、それより以前の、またそれ以後の歌類の検討を通して、それを立証基底としなければならぬ。

本論の対象語としての「忘れ貝」類の語は、万葉集より以前の歌類と認め得るものの中には、現在資料においては、「忘れ貝」「恋忘れ貝」のいずれの語形のものも存在しない。なお、類型語としての「恋忘れ草」「忘れ草」の語類もまた見出され得ない。更に、万葉集より以後の歌類については、現在、残念ながら、その十分な検索をなし得ていない。しかし、ただ、筆者が既発表論考において万葉情意語と認め得た用例語においては、そのほとんどすべてを通じて、万葉語としての情意語は、万葉集代と、平安時代以後との、作歌（詠歌）の「場」と「時」との性格の相異を基底として、平安時代以後においては、その外型的類型継承態、もしくは、その特定性格の喪失態において、ただ単に慣用的に継承されている状態のみである。故に、本論の用例語においても、万葉集より以後の継承態の検索は、「忘れ貝」類の語を、「万葉情意語」と認めることに關し

て、さほど重要な反証資料とはならないものとなし得るのである。故に、本論の対象語である、「忘れ貝」類語中から、それを恋情意語と認め得た用例語は、これを更に「万葉情意語」と認め、称することは、現在の研究資料の段階においては、一応、承認・許容され得ることである。

なお、これに、準じて、「恋忘れ草」「忘れ草」類の語も、また現在においては、これらを、一応「万葉情意語」と称することが可能であると考えることである。（一九六二・七・三・整稿）

注①「葦垣」考（『和歌文学研究』第3号）

「葦垣の思ひ乱れて」（『万葉』第27号）

「葦垣の外に——家持と池主」（『万葉集研究』第3号）

「垣はなす人」（『万葉集研究』第5号）

「葦垣の古りにし里」（『国学院雑誌』第61卷1・2号）

「垣越ゆる 犬呼びとして」（『解釈』第65号）

「安良我伎麻由美」新考（『美夫君志』第2号）

「万葉語例言——情意語の性格について」（『武蔵野文学』6）

「をとららが袖ふる山のみづ垣」（『上代文学』第11号）

「万葉語再言」（『万葉集研究』第6号）

②「旅人の望郷歌」（『上代文学』第8号）

③増訂万葉集全註積六 本文篇四（巻の六・七）

④大伴坂上郎女の歌風については、小論「大伴坂上郎女の歌——その時と場」（『和洋女子大学紀要 第五輯』）を参照願いたい。